

博多祇園山笠に関する著作について(前編)

Publications related to Hakata Gion Yamakasa (Vol.1)

清水 享^aToru Shimizu^a

Abstract

Hakata Gion Yamakasa is a festival held every July in the Hakata Ward of Fukuoka City in Fukuoka Prefecture, with a tradition of more than 770 years. People make offerings to Kushida Shrine and other places in the festival. This paper is a collection of works published after World War II on Hakata Gion Yamakasa, with some discussion. The publications include commemorative magazines, commentary books, novels, collections of photographs, paintings, and cartoons. The paper describes them and shows some tendencies in the works on Hakata Gion Yamakasa.

Key words: 博多祇園山笠, 福岡, 著作, 流, 博多祇園山笠振興会

1. はじめに

福岡県福岡市博多区において、博多祇園山笠が夏季に盛大に執り行われる。この博多祇園祇園山笠は2022年現在、およそ770年以上の歴史を有するとされる。世界中に蔓延した新型コロナウイルス流行の影響を受け、2020年度は全面的に中止となり、2021年度は「飾り山」ⁱが設置されたものの、「昇き山」ⁱⁱなどの行事は中止となった。そして2022年度は3年ぶりに再開された。

本稿はこの長い歴史を有する博多祇園山笠について、戦後どのような著作があったのかを検討し、それらがどのように発信されたのかを概観する。博多祇園山笠がどのような方向性で記録され、語られ、紹介され、考察されたのか、検討するものである。すなわち博多祇園山笠についてスポーツ、文化、宗教、歴史、社会、文学、芸術などの各方面から、どのように綴られ、まとめられたのかを整理分析を行なうものであ

る。著作そのものが博多祇園山笠を中心のテーマとしているものと、博多についての著作の中の一部として博多祇園山笠を取り上げているものの両者があるが、本稿では可能なかぎり、その両者について取り上げる。誌幅の関係で学術論文や雑誌記事などを基本的に言及せず、著作のみに限定する。

2. 博多祇園山笠

博多祇園山笠は7月1日から15日にかけて執り行われる祭事である。本祭事は博多の総鎮守である櫛田神社の素戔鳴尊^{スサノミコト}への奉納神事である。7月1日に「注連(しめ)下ろし」ⁱⁱⁱ、「御神入れ」が行われ、また「飾り山」^{iv}が設置される。7月9日に全ての「流(ながれ)」^vが箱崎浜へ「お汐井」と呼ばれる清めの「真砂(まさご)」を取りに行き、7月10日から「昇き山」が実際に動き出す。7月10日は「流昇き」、11日には「朝山」、「他流昇き」、12日には「追い山ならし」、13日には「集団山見せ」、14日に再び「流昇き」が行わ

『スポーツ科学研究』執筆要領の規定により、前後編に分割して掲載する。

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

i 山笠のことを「山」とも呼ぶ。「飾り山」は高さが10mにも及び、その山に飾られている博多人形などの装飾を鑑賞する。上川端通の飾り山以外、その場に設置するのみで昇く、すなわち担ぐことはない。

ii 「昇き山」は櫛田神社や博多区内を実際に昇いて回る。

iii 「注連(しめ)下ろし」は流を清め、その結界を示す。

iv 2022年度は博多区以外の新天町商店街やPaypayドームなども含め、13基が設置された。

v 「流」は山笠を行なう町内の連合体の単位であり、現在、「土居流」、「恵比須流」、「大黒流」、「東流」、「中洲流」、「西流」の「七流」が昇き山行事を行なっている。

れ、15日早朝にクライマックスである「追い山」を迎えるのである。

昇き山は重さ1トンあり、これを26人あるいは28人の昇き手で昇く^{vi}。そして「追い山ならし」や「追い山」などでは櫛田神社内の「清道」に入る「櫛田入り」を行なう。この「櫛田入り」の距離は112mしかないが、ここは交代せずに30秒あまりで走り抜ける。その後博多区内のおよそ5kmのコースを30分あまりの時間で昇いて回る。距離が長いので、多くの人々が交代をして、動きを止めず「山」を進める。「山」には車輪などなく「台脚」には「銅がね」と呼ばれる鉄の台座があるのみであり、水で濡れた路面を引きずり進むのである。明治以降、「櫛田入り」と「追い山」はコースタイムを計測する。ただ奉納神事のため、基本的には順位はつけない。

ちなみに博多祇園山笠は2016年に他の32件の「山・鉦・屋台行事」とともにユネスコ無形文化遺産に登録された。博多祇園山笠はその名称に祇園とあるように、京都の祇園祭の山鉦と同一の意義があるものとされる^{vii}。祇園祭は京都祇園祭をはじめ各地で行われており、疫病の流行が牛頭天王の祟りであるとして、これを祀る祭礼である。「山笠」自体は北部九州に分布し、廃れたものを含めて百数十にのぼり、その形態、使用人形、人形師から整理すると博多系、津屋崎系、直方系、浜崎系、日田系の5系統に分類できるとされる^{viii}。

3. 博多祇園山笠小史

櫛田神社が鎮座されたのが757年であり、941年(天慶四年)に小野好古が京都より祇園神^{ix}を勧進しており³⁾、これを博多祇園山笠の起源とする説もある。ただ起源として広く支持されているのは1241年(仁治二年)説である。これはこの年の夏に博多で疫病が流行したため、承天寺開祖である聖一国師弁円^xが疫病退散の祈禱を行ない、施餓鬼棚から祈禱水を撒き、疫病を鎮めたことが始まりとされる⁴⁾。この他に1432年(永享四年)説もあり、これは1609年(慶長十二年)に

成立した『九州軍記』にこの年の櫛田神社の祭礼に関しての具体的な記述があることから起源とするものである⁵⁾。

豊臣秀吉が九州平定後の1587年(天正十五年)に博多に滞陣して博多町割りを命じ、これにより自治組織の「流」が生まれ、博多祇園山笠もこの「流」を基礎に運営されるようになった⁶⁾。

江戸時代になり、1687年(貞享四年)に町同士の些細な争いから、前を行く山笠を追う「追い山」が始まったとされる。順番に「櫛田入り」をして順路に沿って走らなくなったのは1974年(寛保三年)のことだった⁷⁾。

明治時代に入ると福岡県によって1875年(明治五年)に山笠禁止令が出され、年中行事の「松囃子」も同じく禁止された。また1875年(明治八年)には「ゆかた山笠」という山笠が建ち⁸⁾、その後も許可を得ずに山笠を昇いた流れもあった⁹⁾。1883年(明治十六年)に山笠はようやく復活した¹⁰⁾。禁止令以前の山笠は「五十二、三尺」すなわち約16mの高さがあったが、電信線架設のため、この高さの山笠は不可能となった¹¹⁾。1989年(明治三十一年)に福岡県知事による山笠中止論が出され論争となり、その結果「昇き山」と「飾り山」の分離した様式で存続となった¹²⁾。

第二次世界大戦中も博多祇園山笠は存続したが、戦争末期の1945年(昭和二十年)6月に「福岡大空襲」があり、この年の山笠は中止せざるを得なかった¹³⁾。戦後となり1946年(昭和二十一年)に「第一次博多復興祭」で絵を載せた「中子供山笠」が復活し、翌年も「子供山笠」が作られ、1948年(昭和二十三年)に博多祇園山笠は復活し、「櫛田入り」を行なった¹⁴⁾。

1949年(昭和24年)に「博多祇園山笠振興期成会」が発足し、この会は1955年(昭和三十年)に、博多祇園山笠の恒久的な存続を目指す「博多祇園山笠振興会」へと発展した¹⁵⁾。1965年(昭和四十年)から1974年(昭和四十九年)にかけて町界町名整理が博多地区で実施され、「町」を単位とする「流」も再編成を余儀なくされ、解散をした「流」もあった¹⁶⁾。

vi 昇き手以外に「あと押し」が「山」を動かす推進力となる。

vii 祇園神は牛頭天王、素戔鳴尊などによる神仏習合の神として信仰された。

viii 円爾という名もある。

4. 博多祇園山笠に関する著作

博多祇園山笠に関する著作や雑誌記事は非常に多く、それを全て網羅することは難しい。ここでは現状で可能な限り、20世紀半ば、すなわち戦後以降に発表刊行されたもので収集することができた著作について言及する。

4.1. 1950年代の著作と落石栄吉

1950年代に刊行された博多祇園山笠に関する著作として落石栄吉著『博多祇園山笠今昔物語』(1952.6, 博多祇園山笠振興期成会)^{ix}がある。博多祇園山笠に関する起源、祭事の担い手と進め方、山笠の構造、山笠の昇き方など多方面にわたり詳述しつつ、また博多祇園山笠に関する歴史もまとめている。1680年(延宝八年)から1868年(慶応四年)までの山笠の飾りつけの表題を記録した『山笠歳代記』^xなど江戸時代やそれ以前の史料も紹介し、博多祇園山笠の年代記をまとめている。その他に博多の年中行事である松囃子やどんたくについても付記している。落石栄吉はさらに1961年(昭和三十六年)に『博多祇園山笠史談』(1961.6, 博多祇園山笠振興会)も著し、前著より詳細に博多祇園山笠の全貌と1961年(昭和三十六年)当時までの歴史をまとめている。さらに1967年に刊行した『戦後博多復興史』(1976.11, 戦後博多復興史刊行会)には「博多祇園山笠(続, 博多祇園山笠史談)」という章を設けて1961年(昭和三十六年)以降の状況をまとめている。

落石栄吉は他に『博多山笠はかくして復興せり』(1955.1, 博多祇園山笠振興期成会)という18ページの小冊子も編集、刊行している。本書は博多祇園山笠振興期成会結成5周年及び「博多山笠」が福岡県の「重要文化財」に指定されたことを記念して刊行された¹⁷⁾。1944年から1954年までの「博多祇園山笠振興史」の年表と1948年(昭和三十二年)から1954年(昭和三十九年)までの「振興普及の事蹟年表」をまとめたもの

だった。

落石栄吉は博多祇園山笠振興会の前身である博多祇園山笠振興期成会の会長であり、博多祇園山笠振興会発足当時の会長も務めた人物である。いわば戦後における博多祇園山笠振興の立役者である。この落石栄吉が博多祇園山笠について残した資料が現在福岡市総合図書館に所蔵されている。そしてそれらは新聞記事から各種書付け、書状、メモまで多岐にわたり、戦後の博多祇園山笠史を研究する上で第一級の史料であるといえよう。

1950年代には他に三宅酒壺洞が編纂した『博多山笠年表』(1954, 刊行元不明)がある。1243年(寛元元年)の承天寺の記録から1954年(昭和三十九年)に博多祇園山笠が重要文化財に選定されたことまでが年表の形式で折本の小冊子としてまとめられている。

また1955年(昭和三十年)には田中善徳の詩集である『夏すがた博多山笠』(1955.9, 夕刊フクニチ新聞社)が刊行された。「後記」に夕刊フクニチの企画で連載した詩をまとめたものであると述べられている。本書は数名が跋文を書いており、その中には落石栄吉のものもある。また1953年(昭和三十八年)以前に『山笠早わかり』、『山笠しおり』^{xi}といった冊子も刊行されたようである¹⁸⁾。

4.2. 博多祇園山笠振興会による記念誌

1975年(昭和五十年)に博多祇園山笠振興会は『博多山笠記録』(1975.3, 博多祇園山笠振興会)を編纂した。博多祇園山笠に関する文献、絵画、器物、古写真および現況などの多くの写真を掲載し、これらは全体の半分を占める。後半は文化財保護委員会(現文化庁)の依頼を受けてまとめた「博多津中年令階梯制」および「博多年代記」が掲載されている。「博多津中年令階梯制」では、博多祇園山笠を運営する組織の中核をなす年齢階梯制の歴史的経緯と現況についてまとめられている。「博多年代記」は、797年(延暦十六年)に成立した『続日本紀』に「博多大津」の記載があっ

ix 本稿で言及する著作は紙幅の制限により、書誌情報は本文に示し、引用参考文献には示さない。以下全ての著作の書誌情報は同じように示す。

x 江戸時代後期に書かれた『山笠歳代記』および『山笠歳代記事項抜萃：祇園祭礼』は成立年不詳であるが、その手抄本は福岡市総合図書館に所蔵されている。

xi 『山笠早わかり』、『山笠しおり』については福岡市総合図書館、福岡県立図書館、九州大学附属図書館にも所蔵されておらず、未見。

た759年(天平宝字三年)の事項から1964年(昭和三十九年)までの事項をまとめた年代記である。特に江戸時代の事項などは多くの文献の記載を引用し、これをまとめている。

博多祇園山笠振興会が発足し、1985年(昭和六十年)で30周年を迎えたことにより、博多祇園山笠振興会は『博多山笠:博多祇園山笠振興会30周年記念誌』(1986.1, 博多祇園山笠振興会)を編纂し、刊行した。本書では戦後の博多祇園山笠の復興と博多祇園山笠振興期成会の発足、そしてこの期成会から博多祇園山笠振興会へと発展した1955年(昭和三十年)とその後の1984年(昭和五十九年)までの30年間の年代記がまとめられている。1980年(昭和五十五年)には、ハワイ遠征をし、「ハワイのアロハ・ウィーク・フェスティバル」へ参加した時の状況が述べられている。またこの記念誌には「資料編」もあり、1955年(昭和三十年)から1984年(昭和五十九年)における「追い山 追い山ならし全記録」と題して「櫛田入り」および「全コース」のタイムの記録と「山笠標題」ⁱⁱと題して「昇き山笠」、「飾り山笠」の表題がまとめられている。博多祇園山笠の海外遠征はその後も行なわれ、1988年(昭和六十三年)5月にはオーストラリアのブリスベン、ニュージーランドのオークランドでも昇き山が現地で昇かれた。この遠征に関して博多祇園山笠振興会は、保坂晃孝編著による『ブリスベン・オークランド博多祇園山笠親善使節団記念:昭和63年5月』(1989.1, 博多祇園山笠振興会)といった記念小冊子を刊行した。

博多祇園山笠振興会は発足40周年を迎えた1995年(平成七年)に、戦後50年であったことも記念し、博多祇園山笠振興会編による『戦後五十年博多祇園山笠史:博多祇園山笠振興会創立四十周年記念』(1995.6, 博多祇園山笠振興会)を刊行した。本書は『博多山笠:多祇園山笠振興会30周年記念誌』の年代記に、さらにその後の10年間の年代記を追加したものだった。また1958年(昭和三十三年)から発行された「博多祇園山笠しおり」という広報紙を付録で掲載していることは注目される。

博多祇園山笠振興会は発足50周年に際しても、博

多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会編集『博多祇園山笠五十年史』(2004.6, 博多祇園山笠振興会)を刊行した。こちらもそれまでの記念誌同様、その後10年間の年代記を追加したものだった。

2014年(平成二十六年)には博多祇園山笠振興会六十年史編纂委員会編『博多祇園山笠六十年史』(2004.6, 博多祇園山笠振興会)が刊行された。こちらもそれまでの記念誌同様、その後10年間の年代記が追記された。また「博多町屋」ふるさと館学芸員である山田弘明による「特集 明治の新聞記事に見る博多祇園山笠」という章が設けられ、明治時代の博多祇園山笠の様子を新聞記事から詳述している。

博多祇園山笠振興会は発足後、30周年、40周年、50周年、60周年と10年ごとに記念の年代記を刊行しており、これらは基本的にはそれまでに刊行した年代記を踏襲し、それぞれ新たな年代を加えた内容であった。

4.3. 各流による記念誌

1990年(平成二年)に松井喜久雄著『東流のあゆみ:戦後の世相』(1990.11, まつい工務店)が刊行された。著者は東流の「総務」まで務めた人物である。彼は後述する『博多のうた』(1980.9初版, 1991再版, 1998.10再々版, 松井喜久雄), 『雑学富貞月亭』(1993.9, 松井喜久雄), 『川柳博多歳時記』(1994.9, 松井喜久雄), 『博多方言』(1997.4, 松井喜久雄), 『はかた博学帖』(2002.10, 松井喜久雄)などの編著がある。本書は博多祇園山笠の実働する町内の単位である流のうちの一つである「東流」の歴史を振り返る内容であった。

以降、特に50周年などを記念した各流の年代記などが刊行されるようになった。1999年(平成十一年)に中洲流50周年実行委員会編『中洲流:五十年の軌跡』(1999.6, 中洲流)と博多祇園山笠千代流運営委員会編『博多祇園山笠千代流五十周年記念誌』(1999.7, 千代流)が刊行された。いずれも写真を多く掲載した50周年の年代記であった。

その後、2015年(平成二十七年)以降、各流などで、改めて年代記が刊行された。2015年(平成二十七年)には八番山笠上川端通五十周年記念誌編纂委員会編

xii 博多祇園山笠には人形飾りが載せられ、この飾りにはそれぞれテーマとなる標題が毎年つけられる。

『五十年を走り抜けた 八番山笠上川端通50周年記念誌』(2015.6, 上川端通)^{xiii}、翌2016年(平成二十八年)には博多祇園山笠西流五十周年史編纂員会編『博多祇園山笠西流五十周年史:1966-2015』(2016.7, 西流)が刊行された。いずれもこの50年の歴史を振り返る内容であった。その翌年2017年(平成二十九年)には東流50周年記念誌実行委員会編『東流のあゆみ 博多祇園山笠東流50周年記念誌』(2017.1, 東流)と土居流記録簿編集委員会編『土居流記録簿』(2017.2, 土居流)が刊行された。いずれも50年の歴史や記録が整理され掲載されたものであった。後者については名称に「記録簿」とあるように1950年代から1960年代に筆記された原資料の「記録」の一部を掲載しており、注目に値する。

2018年(平成三十年)には古ノ一50周年記念誌発行委員会編『古ノ一五十年:大黒流古ノ一五十年周年記念誌』(2018, 大黒流古ノ一)が刊行された。先述したいくつかの記念誌は流の歴史的経緯を綴ったものだが、本書は大黒流の「古ノ一」、すなわち「古門戸町一区」の町内の50周年記念誌であり、非常に珍しい。1966年(昭和四十一年)に実施された「町界町名整理事業」によって生まれたこの町内の歴史をまとめている。またこの町内に属した旧町内の解説と町内の当番町の記録なども収められている。

2015年(平成二十七年)から2018年(平成三十年)の間に刊行された上記の記念誌はいずれも1966年(昭和四十一年)に行なわれた「町界町名整理事業」の影響を受け、流の再編等を余儀なくされ、その後の50年の歴史を振り返ったものだった。

参考文献

- 1) 落石栄吉, 博多祇園山笠史談, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 1961.6, 41.
- 2) 福岡裕爾, 山笠の分布とハカタ文化圏, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 94-107.
- 3) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 40.
- 4) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 26.
- 5) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 26.
- 6) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 29.
- 7) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 31.
- 8) FUKUOKA STYLE編集部, 山笠年表, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 51.
- 9) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 32-34.
- 10) 西日本新聞社・福岡市博物館 [編], 博多祇園山笠大全, 初版, 西日本新聞社, 福岡, 2013.11, 32-34.
- 11) FUKUOKA STYLE編集部, 山笠年表, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 51.
- 12) FUKUOKA STYLE編集部, 山笠年表, HUKUOKA STYLE, 1994, Vol.9 ([総力特集] 博多祇園山笠: 祇園祭の系譜), 51.
- 13) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 18.
- 14) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 18-19.
- 15) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 19, 38.
- 16) 博多祇園山笠振興会五十年史編纂委員会 [編], 博多祇園山笠五十年史, 初版, 博多祇園山笠振興会, 福岡, 2004.6, 53.
- 17) 博多祇園山笠振興期成会 [編], 博多山笠はかくして復興せり, 初版, 博多祇園山笠振興期成会, 福岡, 1955.1, 1-3.
- 18) 博多祇園山笠振興期成会 [編], 博多山笠はかく

xiii 上川端通は流ではないが、毎年八番山笠として追い山に参加している。

して復興せり，初版，博多祇園山笠振興期成会，
福岡，1955.1，2.

博多祇園山笠に関する著作について（後編）

Publications related to Hakata Gion Yamakasa (Vol.2)

清水 享^aToru Shimizu^a

博多祇園山笠に関する著作について（後編）
（前編より続く）

4.4. 博多祇園山笠についての概説，論考およびガイドブック

1970年代に福岡県夏の三大祭り推進協議会が『九州福岡県夏の三大祭り』（1976.5, 福岡県夏の三大祭り推進協議会）ⁱと銘打ち，小倉祇園太鼓，戸畑祇園大山笠とともに博多祇園山笠を写真とともに紹介した。三大祭り推進協議会には博多祇園山笠振興会や福岡県，福岡市も参画しており，本書は観光推進のパンフレットであった。

1990年代に博多祇園山笠を解説したガイドブックや特集を組んだムックが刊行された。ふくおか文庫編集部による『博多山笠げなげな読本：ぐんぐんわかる博多祇園山笠ガイドブック』（1994.6, プランニング秀巧社）は図を多用し，山笠の形態や道具などの詳細を解説している。さらに起源，歴史，日程，各流の特徴などにも触れている。この他に「大検証！山笠の科学」の章では，山笠の組織や山笠に魅せられる人々の理由などの分析も行なっており，興味深い。FUKUOKA STYLE編集部による『HUKUOKA STYLE Vol. 9 [総力特集] 博多祇園山笠：祇園祭の系譜』（1994.6, 星雲社）はムックであるが，多方面から博多祇園山笠について詳述している。京都の祇園祭，祇園祭の系譜，博多祇園山笠の起源や歴史，「ごりょんさん」ⁱⁱや人形師について解説し，さらに九州北部各地のそれぞれの山笠も詳細に解説している。また本書には英文による解説も付記されている。

2000年（平成十二年）に中西正則編著による『博多山笠記録巻之壹 博多祇園山笠七百五十九年の傳統 大正元年より平成十二年までの八十九年の記録綴』が刊行された。これは大著であるが，私家版のもので現在福岡市総合図書館に所蔵されている。本書は大正初期から2000年（平成十二年）までの山笠に関連する資料を収集したものである。恵比須流の内容が中心であり，山笠の表題などの説明も見られる。また江戸期の古地図，絵図および明治期の街並みや山笠の写真，古地図も収録している。

2010年代において，注目される著作として西日本新聞社，福岡市博物館編『博多祇園山笠大全』（2013.11, 西日本新聞社）がある。本書は「大全」と書名にあるように博多祇園山笠について網羅的にまとめた概説書である。その歴史的経緯と行事日程，用語，京都祇園祭や各地の山笠との関係などが詳しく述べられている。また江戸時代の山笠の絵図や明治時代の写真なども多く掲載されている。

さらにアクロス福岡文化誌編纂委員会が編纂した『福岡の祭り』（2010.3, 海鳥社「アクロス文化誌4」）では，「夏：魂の躍動 祇園・山笠 豪華なヤマが街を彩る」，「豊前の祇園祭 各地に伝わる多彩なヤマ」として，博多祇園山笠をはじめ福岡県内の山笠や祇園祭についての概要を述べている。

この他に佐々木哲哉著による『福岡祭事考説』（2017.2, 鳥海社）では「筑前博多の松囃子と祇園山笠」という章を設け，博多の祭として松囃子と山笠についてその歴史的経緯を考察している。

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

i 本稿で言及する著作は紙幅の制限により，書誌情報は本文に示し，引用参考文献には示さない。以下全ての著作の書誌情報は同じように示す。

ii 「ごりょんさん」は山笠に出る男性の妻のことをいう。

4.5. 博多の町と博多祇園山笠の関係に言及する著作

1974年(昭和四十九年)に博多を語る会が編纂した『大正の博多記(第1部)』(1974.12, 博多を語る会)が刊行された。このなかに追い山の全コースのタイムを計った由来が述べられている。本書は大正期などの博多の様子について記憶をたどって書きまとめたものであり、1975年(昭和五十年)には第2部が、1979年(昭和五十四年)には第3部が刊行された。「博多を語る会」は波多江五兵衛が中心となって、博多の歴史、方言、民俗および山笠以外の松囃子、どんたくについても談義した会であった。

1980年代には井上精三が『福岡町名散歩』(1983.10, 葦書房)や『どんたく・山笠・放生会』(1984.4, 葦書房)を著した。前者では流と町内との関係を簡潔に解説し、後者では山笠について述べている個所で、その歴史を解説しており、特に江戸時代などの様相を比較的詳しく説明している。

1984年(昭和五十九年)には福岡市博多市民センター編『博多の歴史的遺産と現代の課題 市民大学講座 シリーズ「博多を考える」:1』(1984.10, 福岡市立博多市民センター)という市民大学講座の小冊子が刊行された。本書には講座で取り上げた博多の歴史や文化についての内容がまとめられている。博多の伝統の保護育成を目指す博多町人文化連盟の事務局長であった帯谷瑛之介が講師となり、「博多の自治とまつり」の講座が開かれ、その中で博多祇園山笠について言及している。ここでは山笠に関わる人々の関係性を端的に述べており、興味深い。また本書の「博多のごりょんさん」の講座は波多江五兵衛が担当した。

この波多江五兵衛の著作には『博多物語』(1988.3, 松井喜久雄)もある。内容は東流の有志が「博多を語る会」の波多江五兵衛を招いて行なった学習会の資料であり、これを整理したものであった¹⁾。特に町名の由来などについて詳述している。「博多を語る会」は博多に関する「うた」も収集していた。収集した「うた」は波多江五兵衛解説、松井喜久雄編纂『博多のうた』(1980.9, 松井喜久雄)としてまとめられ、刊行された。博多祇園山笠の追い山の一番山が清道入りをしたときに歌う「博多祝い唄」をはじめ、博多祇園山笠を歌う「うた」もいくつか見られる。本書は1991年(平成三年)に再版が刊行され、1998年(平成十年)10

月に改めて増補した再々版が刊行された。この再々版には「うた」の数字譜も掲載され、「博多の知識」といった項目も加えられた。その中には「山笠の八文字」、「山笠の酒に梅干を出すわけ」など山笠に関する事項も掲載された。

松井喜久雄は他に『雑学富貞月亭』(1993.9, 松井喜久雄)を著し、博多の言葉、哲学、雑学などについて述べ、中には博多祇園山笠についても言及している部分もある。彼は他に泉敦夫による私家版川柳句集について、改めて編集し、自らの文も書き添えた句集を刊行した。それが泉敦夫・松井喜久雄著『川柳博多歳時記』(1994.9, 松井喜久雄)である。本書には泉敦夫による「年寄りの目に棒締めにある手順」、「當番町の氣持が重い取締り」などの山笠の句が収められている。さらに松井喜久雄は『博多方言』(1997.4, 松井喜久雄)も著した。本書は博多の方言をあいうえお順にまとめたものであるが、博多祇園山笠を含め、博多についての随筆も収められている。彼はまた『はかた博学帖』(2002.10, 松井喜久雄)も著した。本書には博多に関わるさまざまなエピソードが収められているが、博多祇園山笠については複数の写真が掲載されているのみで、エピソードは収録されていない。これら松井喜久雄が刊行した著作はいずれも商業出版ではなかった。

2000年代以降、いくつか博多祇園山笠に言及する著作が刊行された。岩波新書からは武野要子著『博多：町人が育てた国際都市』(2000.12, 岩波書店)が刊行された。本書は、博多の歴史と文化についてまとめているが、博多祇園山笠についての説明は少ない。

新貝行生著による『中洲物語』(2002.6, 海鳥社)は、九州一の歓楽街と呼ばれる中洲地区についての新聞連載記事をまとめたものである。中洲に関わる人々に直接インタビューをして、中洲の歴史と実情を詳細に語っており、中洲と山笠の関係も詳しく述べられている。

宮崎克則、福岡アーカイブ研究会編による『古地図の中の福岡・博多』(2005.12, 鳥海社)では博多祇園山笠の活動単位である流の町割りについて、江戸時代などの古地図より説明を加えており、博多祇園山笠の歴史地理を知る上で非常に参考となる。

1997年(平成九年)から西日本新聞に連載された企画「博学博多 ふくおか深発見」が再構成され、西

日本新聞社編『博多博学 ふくおか深発見』(2007.6, 西日本新聞社)として刊行された。本書は福岡や博多に関する歴史、文化、人物などについて述べており、博多祇園山笠についても概要が記されている。本書は調福男、渕浩子著『博多博学200 増補改訂版』(2014.3, 西日本新聞社)として、増補版として改めて刊行された。

2014年(平成二十六年)に日高三朗、保坂晃孝著による『博多旧町名歴史散歩』(2014.2, 西日本新聞社)が刊行された。1966年(昭和四十一年)に行なわれた「町界町名整理事業」は博多の133か町が24か町に整理され²⁾、博多祇園山笠にも大きな影響を及ぼした。本書は事業前の旧町名と町内について詳述し、さらに博多祇園山笠やどんたく、松囃子との関係などを詳しくまとめている。

4.6. 博多祇園山笠に関するエッセイ及びノンフィクション

1992年(平成十四年)には大庭宗一著『博多んもんの詩「山笠生命の男たち」』(1992.4, 酒房やす)が刊行された。大庭宗一は「土居流」の「取締」ⁱⁱⁱを務めた人物であり、本書は博多祇園山笠についてのエッセイ集である。山笠に自ら参加し、深く関わっている人物の随筆はこの時代の山笠の状況を端的に表しており、非常に興味深い。大庭宗一は2000年(平成十二年)に『山笠の風：博多の風を追いかけて』(2000.5, プランニング秀巧社)を著した。本書には山笠についての随筆と詩が収められている。また7つの流の概要と特徴について、それぞれの流の関係者がまとめている部分もあり、これは注目される。

2007年(平成十九年)に西日本新聞社から保坂晃孝、石橋清助による『おっしょい山笠』(2007.7, 西日本新聞社)が刊行された。本書は西日本新聞の保坂晃孝が石橋清助博多祇園山笠振興会会長から聞き取りをして、まとめたものである。いわば博多祇園山笠のオーソリティーによるオーラルヒストリーであり、戦中から平成の時代までの博多祇園山笠および博多の状況について当事者の立場から語られており、史的な価値

があるといえよう。

4.7. 博多祇園山笠についての写真集、絵画集

1977年(昭和五十二年)には石橋源一郎、波多江五兵衛編による『思い出のアルバム・博多あの頃：明治・大正・昭和を綴る』(1977.5, 葦書房)が刊行された。本書は明治から昭和までの博多の様々な写真を収集したものであり、博多祇園山笠の写真も掲載されている。また本書には写真ではないが、当番法被^{iv}の一覧も付録している。

1980年代になると写真集として菅洋志が撮影し、長谷川法世が文章を書いた『博多祇園山笠』(1983.6, 講談社)が刊行された。菅洋志も長谷川法世も博多出身であり、長谷川法世は後述する漫画『博多っ子純情』の著者として知られている。この写真集が博多祇園山笠の写真集としては嚆矢であろう。本書にはさらに博多祇園山笠の解説、江戸期の山笠図、明治期の写真、当番法被の解説、山笠の縁起などもまとめられている。菅洋志は1995年(平成七年)に改めて写真集『博多祇園山笠』(1995.6, 海鳥社)を刊行している。こちらは撮影だけでなく文章も自ら綴っている。

1993年(平成五年)には日高裕行が著した『写真が語る大黒流』(1993, 日高裕行)が刊行された。著者は大黒流で取締を務めた人物であり、本書は取締退任後、撮りためた写真をまとめたものだった。写真集のなかには山笠のみならず松囃子の写真も掲載されている。

2004年(平成十六年)にはこにしかずよし著『博多祇園山笠きり絵』(2004.6, 海鳥社)が刊行された。これは切り絵アーティストのこにしかずよし(小西一珠喜)が博多祇園山笠を題材に制作した切り絵集であり、モノトーンの切り絵だけでなく、カラーの切り絵も収められている。また各流の人々の切り絵とともに各流の解説が簡単に述べられている。こにしかずよし(小西一珠喜)は、2010年(平成二十二年)に改めて『博多祇園山笠 全流当番法被きりえ図鑑 水法被・長法被』(2010.12, 博多きりえ)といった切り絵集も刊行している。こちらは切り取ってポストカードとして使

iii 「取締」は山笠の実働部隊である「若手」を取りまとめる責任者。

iv 「当番法被」は「長法被」とも呼ばれ、山笠期間中の正装となる。各流、各町内でその図柄が異なる。

えるようになっている。

2004年(平成十六年)には、さらに進藤祐光が撮影した写真集『1242/2004 写真集 博多祇園山笠』(2004.7, 進藤祐光写真事務所)も刊行された。本書は白黒写真が多く掲載され、非常にスタイリッシュな写真が大半を占め、非常にアーティステックな写真集である。

2006年(平成十八年)に刊行された「博多山笠」刊行委員会編『博多山笠』(2006.7, H・Y・K「博多山笠」刊行委員会)は、写真家の藤本健八が撮影した山笠の写真を中心に博多と山笠についての歴史や由来をまとめている。

2017年(平成二十九年)には八田公子による『博多祇園山笠 夏の風：八田公子写真集』(2017.6, 日本写真企画)が刊行された。写真を撮影したのは博多出身の女性写真家であり、あとがきで「山笠への憧れ」によって、博多祇園山笠を撮り続けている心情を述べている³⁾。

4.8. 博多祇園山笠を題材とした小説、漫画、伝記

1977年(昭和五十二年)に長谷川法世著による『博多っ子純情』(全34巻)(1977.1~1984.9, 双葉社)の第1巻が刊行された。これは『漫画アクション』(双葉社)に掲載された漫画であり、博多を舞台として主人公が中学時代から博多の人形師としての道のりを歩む青年時代までを描いている。そして博多祇園山笠は随所で重要な舞台となり、物語が進められる。

福岡の名産品である明太子は中洲に店舗を構えた「ふくや」がそのパイオニアであり、その創業者である川原俊夫は戦後の博多祇園山笠復興に、中洲流から大いに貢献した。その「ふくや」が創業50周年を記念して、株式会社ふくや50周年記念実行委員会による『博多明太子物語 [ふくやの50年]』(1997.1, 株式会社ふくや)を刊行した。本書には戦後の中洲流の創設についての背景や経緯も述べられている。なお本書には別冊として川原俊夫の生涯と明太子の物語の漫画も付されている。

2009年(平成二十一年)に刊行された山本十夢著『もう一つの山笠：まぼろしの福神流』(2009.4, 梓書院)は、明治時代に解散した福神流についての小説である。博多祇園山笠が舞台背景となる小説や漫画はい

くつか見られるが、山笠そのものを取り上げ、さらに歴史的な小説としてまとめられているものは珍しい。

先述した明太子の「ふくや」の創業者である川原俊夫について、その生涯の業績について子息の川原健が『明太子をつくった男：ふくや創業者・川原俊夫の人生と経営』(2013.1, 海鳥社)が著した。これは川原俊夫生誕100周年を記念して刊行されたものだった。本書には博多祇園山笠について述べられている部分があり、特に中洲流創設とハワイ遠征についてその経緯が記されている。またこの「ふくや」の創業者である川原俊夫をモデルとした小説が、東憲司著『めんたいびりり』(2018.3, 集英社)として2018年(平成三十年)に刊行された。「めんたいびりり」はもともとテレビドラマで放送され、舞台化、映画化もされており、本書はそのドラマを小説化したものだった。中洲で創業し、発展した店舗と創業者のストーリーであり、博多祇園山笠に関わるエピソードも数多く含まれる。

博多祇園山笠の起源に関わる人物である聖一国師と博多祇園山笠について、漫画でまとめられたのが井上政典ほか著『博多の恩人・聖一国師と博多祇園山笠』(2018.6, 集広舎)である。本書は聖一国師についての人物伝であるが、博多祇園山笠の概要にも触れている。

福岡出身の作家である辻仁成が、『真夜中の子供』(2018年, 河出書房新社)を著わした。本書は中洲を舞台として、中洲生まれの戸籍のない少年が山笠に関わるなかで成長するストーリーであり、随所に山笠に関わりのあるシーンがある。

5. 小結：博多祇園山笠に関する著作の特徴

博多祇園山笠の著作を整理するといくつかの特徴がある。

まず落石栄吉が博多祇園山笠史をまとめ、さらに戦後博多山笠史の史料を多く残したことである。博多祇園山笠は終戦後からこの祭を牽引した博多祇園山笠振興期成会とその継続組織である博多祇園山笠振興会によってその歴史が紡がれてきた。そうしたなかで期成会、振興会の会長を務めた落石栄吉が『博多祇園山笠今昔物語』(1952.6, 博多祇園山笠振興期成会)に博多祇園山笠の歴史をまとめたことは、とても意義深い。その後の博多祇園山笠に関する著作や論考は、その多くが著書の基礎の上に成り立っていると看做しても過言

ではなかろう。また落石栄吉は博多祇園山笠について多くの資料を残し、博多祇園山笠史を研究する上で欠くことのできないものとなっている。

次に博多祇園山笠振興会発足30周年以降、10年ごとに記念誌が刊行されたことは注目される。博多祇園山笠振興会発足30周年記念誌である『博多山笠：博多祇園山笠振興会30周年記念誌』(1986.1, 博多祇園山笠振興会)が年代記の形式でまとめ、それに10年ごとの出来事が各周年記念誌に追加されていった。もともとこうした年代記の形式は落石栄吉による『博多祇園山笠史談』(1961.6, 博多祇園山笠振興会)から始まる形式であった。

1999年(平成十一年)および2015年(平成二十七年)から2018年(平成三十年)ごろに50周年を記念する記念誌の刊行も特徴的である。1990年代以降、各流が記念誌をまとめ、刊行したもので、そのはじまりは松井喜久雄著『東流のあゆみ：戦後の世相』(1990.11, まつい工務店)であった。そして1999年(平成十一年)に50周年を迎えた中洲流、千代流が記念誌を刊行した。これらは戦後に発足した流が歴史を振り返ったものだった。2015年(平成二十七年)から2017年(平成二十九年)にかけて上川端通、西流、東流が50周年の記念誌を刊行した。これらは1966年(昭和四十一年)の「町界町名整理事業」の影響を受けて町内が整理されて以降、新たにまとまった流であり、その歴史を振り返ったものだった。2017年(平成二十九年)には土居流も記念誌を刊行したが、こちらも「町界町名整理事業」による流の解散の危機があり、それを乗り越えた歴史をまとめたものだった。また2018年(平成三十年)には大黒流古ノ一の町内の歴史をまとめた記念誌が刊行されたが、こちらも「町界町名整理事業」の影響を受けての再編によるものであるが、一町内で記念誌を刊行するの非常に珍しい。

博多祇園山笠についての概説も複数刊行されたが、

西日本新聞社、福岡市博物館編『博多祇園山笠大全』(2013.11, 西日本新聞社)はそうした概説の集大成であるといえよう。

博多祇園山笠は写真集、絵画集や小説、漫画などの題材や舞台ともなっている。本稿の執筆以前、こうした著作は非常に多くのが刊行されていたと予想したが、収集分析し、本稿を執筆してみた結果、意外にもやや少ない傾向があるように見受けられた。

本稿ではできうる限り、戦後博多祇園山笠に関する著作を整理分析したが、遺漏がある可能性がある。そのため今後も博多祇園山笠に関する著作について、広く収集し、整理する作業を継続し、そして諸賢のご指摘も広く仰ぎ、より詳細な分析も進めなければいけない。さらに本稿では博多祇園山笠についての学術論文、雑誌記事に関しての整理分析は進めておらず、今後改めてこれらを整理分析し、博多祇園山笠研究の基礎的なデータの蓄積をすることが重要であろう。山笠行事は歴史学や民俗学の分野からの研究のみならず、その形態、組織、動作などを分析するスポーツ人類学からの視点による研究もあり、博多祇園山笠を総合的に研究する上で、このスポーツ人類学からの視点はひとつの鍵となるであろう。そのため、博多祇園山笠についての学術論文、雑誌記事に関して整理分析を行なう基礎的研究の論考は今後改めてまとめる予定である。

参考文献

- 1) 波多江五兵衛, 博多物語, 初版, 松井喜久雄, 福岡, 1988.3, 3, 190.
- 2) 日高三朗・保坂晃孝, 博多旧町名歴史散歩, 初版, 西日本新聞, 福岡, 2014.2, 西日本新聞社, 1.
- 3) 八田公子, 博多祇園山笠 夏の風: 八田公子写真集, 初版, 2017.6, 日本写真企画, 東京, 127.